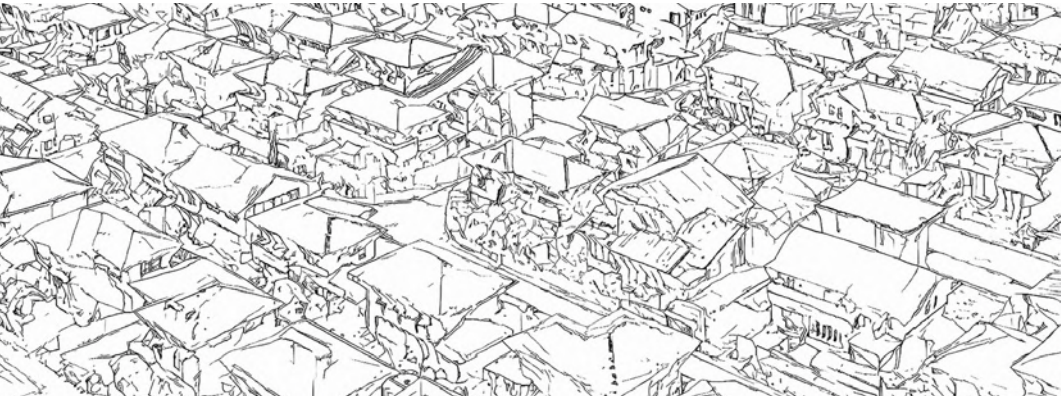
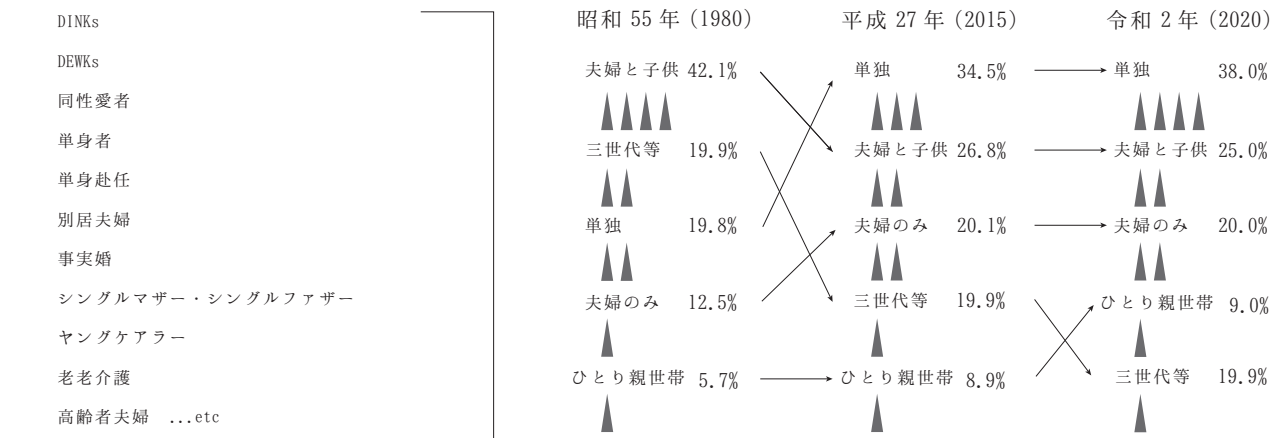
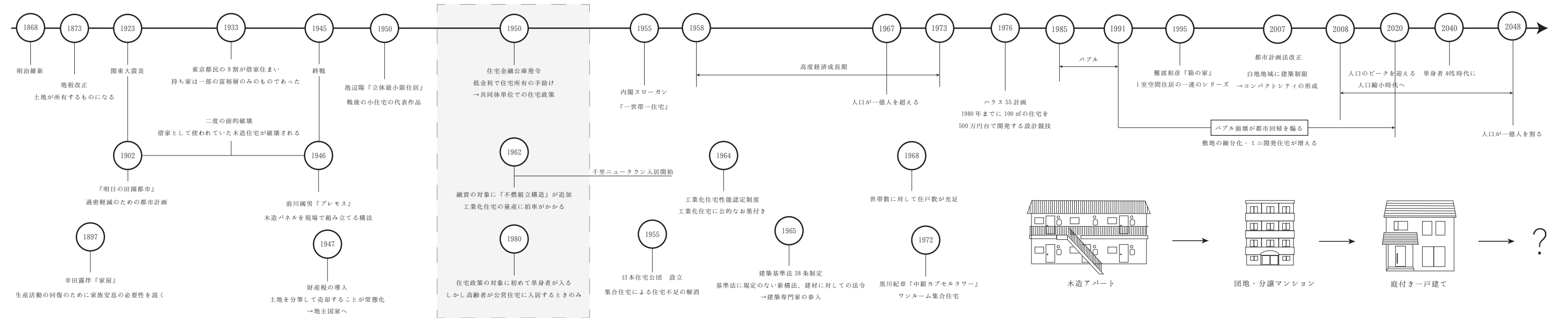


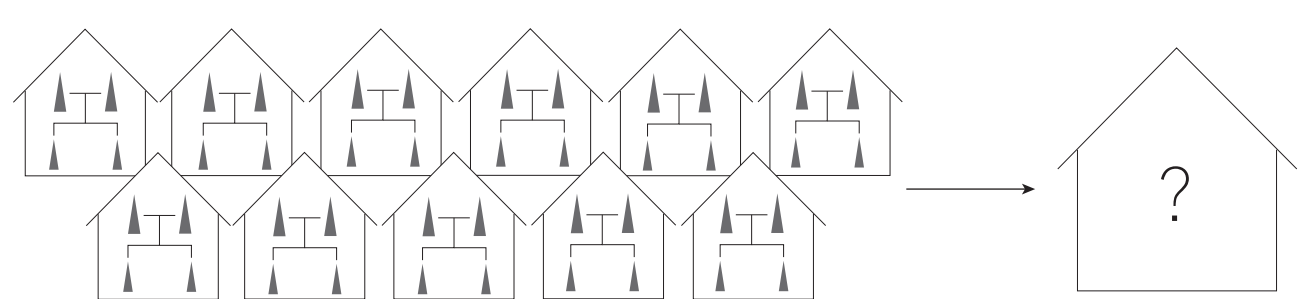


近代住居は近代家族のためにつくられた枠組みである。近代都市計画は標準的な家族像を設定、それらを基本単位として社会を構成した。その過程で生まれたのが近代住居であり、その群れが郊外住宅地である。それら一連の動きは家族の生活や在り方を標準化し、その結果、完成した近代家族はつくられた。しかし、共同体のかたちが多義化されている現代において、家を取り巻く環境を利用する人間のまとまりは『家族』ではなく、新しい共同体に向かっているのではないだろうか。私は、建築によって新たに生まれゆく共同体にかたちを与えたいと思う。本提案は、近代住居の改修行為を『家族の解体』にとらえ、建築の姿として結実させることで、新たな建築形式や、新しい住宅地の在り方を模索するものである。

住居というビルディングタイプは国や都市、産業など、さまざまなスケールにおいて関与している。所有形式の変化や都市政策、住宅産業の歴史を追うことで、近代住居や郊外住宅地がどのように形成されてきたかを分析する。



完成とされていた家族は時間がたち、関係性や社会が変わればそれに合わせて変化する。家族が一時的な完成を経てからする変化は、こと郊外住宅地においてはそのほとんどが減少であり、それゆえ空間は飽和していく。近代的な家族中心であった社会は個人へと解体され、抜け殻になった近代住居群は余り、飽和していく。最も顕著である空き家問題は、建築の問題でもあり、家族の問題でもある。



家や住宅街を利用する共同体の単位は、家族とは違うものに向かっているのではないか。その時、家の単位は共同体の単位の関係性はどのように変化するのだろうか。今ある近代住居をうまく利用しながらそのような家の単位を曖昧なものにしていくことが、新しい共同体を構築するものである。



04-1/proposal

近代住居解体＝新たな共同体に対するタイポロジー / 建築スケールでの設計

庭付き一戸建て

完成した『近代家族』に対するタイポロジー

case1

case2

case3

case4

case5

case6

家族に完成系を与えてしまったのが近代住居だとするならば、それらを改修・解体していくことで住宅地における共同体を再定義し、新たな建築形式を導くことができるのではないだろうか。そこに存在するのは、完成した『家族』に対するパッケージ化された空間ではなく、明確な完成が存在しないさまざまな共同体に対するプロトタイプである。空間が解体されたそれらの建築はときに敷地境界線を超えて結ばれる。そこでは『血縁関係をもった家族が住む』というレトリックはすでに消滅し、むしろ多くの共同体の一部として扱われるようになる。

04-2/proposal

インフラの転換 / 用途の複層化 / 街区スケールでの設計

空き家

空地

駐車場

広場化

道路を挟んだ空き家

人のための道、商店のつらなり

プライベート性が高い『近代家族』から放たれたまちでは、使われなくなった道路や空地が新たなインフラとして作用する。車のために張り巡らされた道路は街区の端に空地ができた段階で駐車場がつくられ、そこに必要な人のみ所有を配することで人のための道となる。道路によって区切られた敷地たちは小さな商店のつらなりをつくることで南北につながる。家放の秩序から放たれ、用途が複層化していく街区は、一家族＝一敷地から、それぞれを共有財産として所有しあう新しい郊外の形ではないだろうか。

05/site

奈良県生駒市北大和団地

枚方市

京田辺市

奈良市

交野市

生駒市

大和郡山市

第一種低層住居専用地域

2018年

2030年

2040年

増加率

1位

生駒市

2480

5030

8100

3.3

2位

香芝市

1100

2150

3410

3.1

3位

大和郡山市

2290

3990

5860

2.6

4位

奈良市

10580

16810

23530

2.2

5位

橿原市

3370

5160

7140

2.1

生駒市は持ち家世帯の割合が89.3%、戸建て世帯の割合が77.2%、県外就業者率51.5%、まさに『住むためのまち』である。大阪郊外の住宅都市として発展してきた経緯を持つが、同時期に同形式の世帯が流入してきたため、ここから数十年で一気に高齢化が進み、衰退すると思われる。自治体は『脱ベッドタウン』を掲げて各地に交流施設や団体をつくり、まちの暮らしを構築したり、市内で働く場所を作り出そうという動きを見せ、定住・移住を促進している。

06.plan

部分設計 / 共同体の形式に新しい形を与えるケーススタディ

CASE3

CASE6

CASE2

CASE5

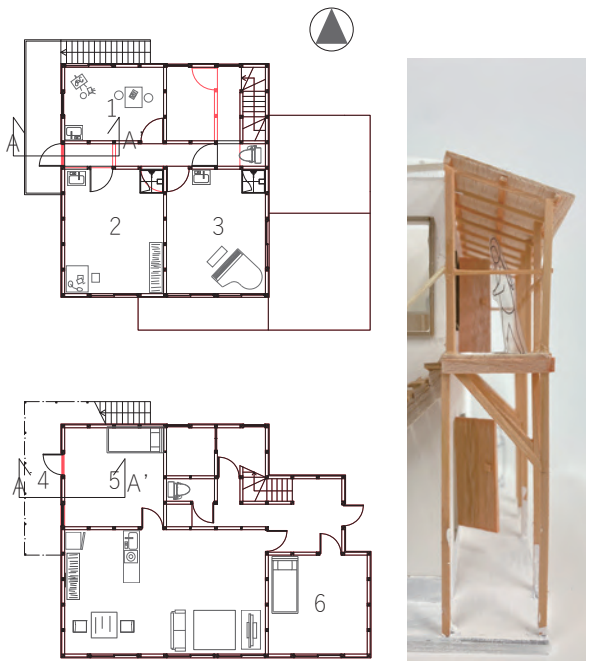
CASE4

CASE1

広域の計画対象範囲から60戸のまとまりをケーススタディとして扱う。部分設計では既存の『家族』の変化によって生まれた空間を改修しながら新しく生まれる共同体の形へと変化させる。60戸の既存プラン、塀などは現地調査やGoogle earthを参考にしながら描いた。

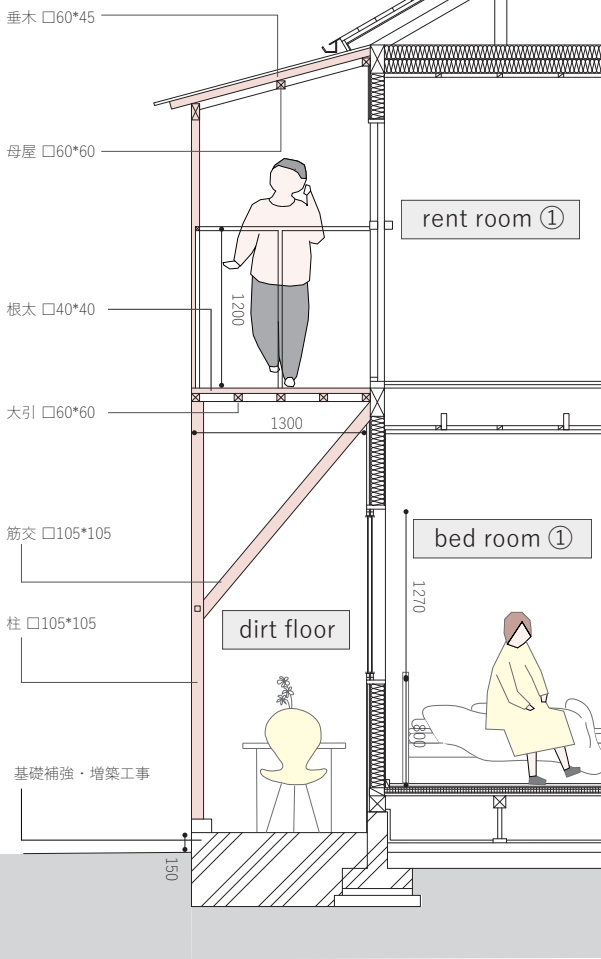


年月が経ち、家族の人員が減り、使わなくなった部屋を地域に開放、簡易的な工法で外部動線を設え、周辺の共同体の変化を受け止める借り部屋、『+αのヘヤ』となる。

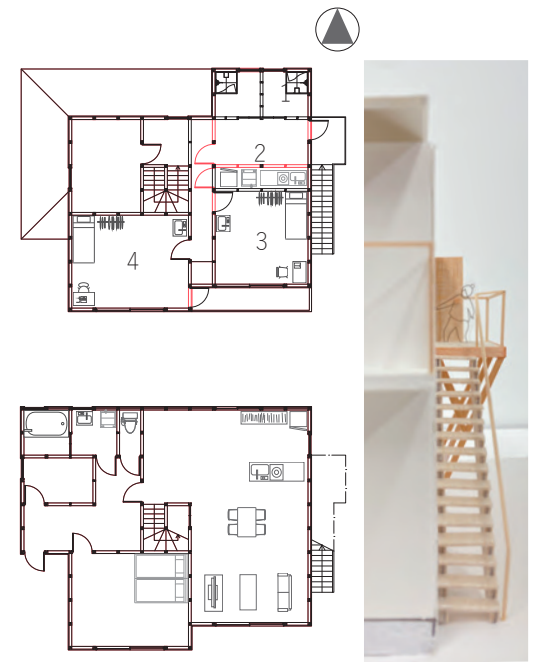


- 1 rent room ①
- 2 rent room ②
- 3 rent room ③
- 4 dirt floor
- 5 bed room ①
- 6 bed room ②

機能：貸し部屋  
工事主・所有者：家所有

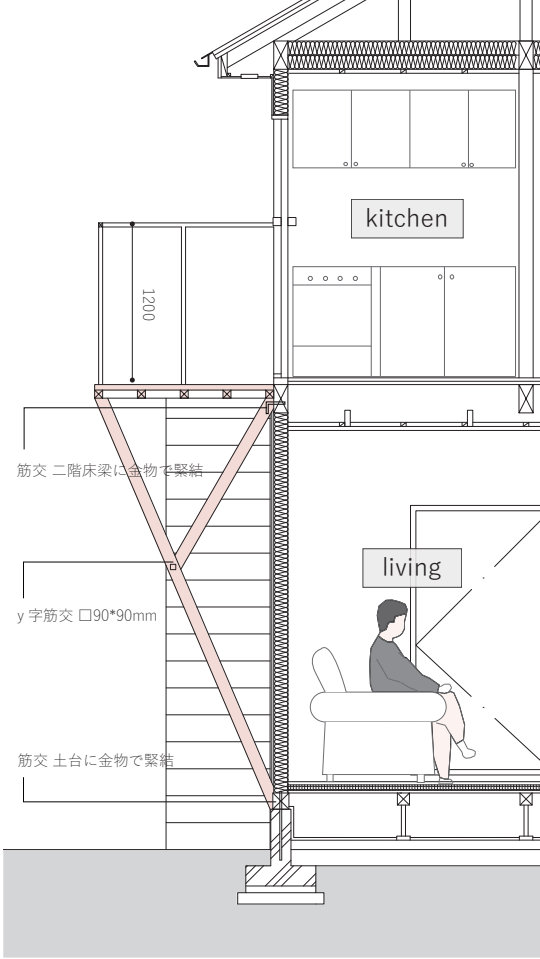


使わなくなった部屋を単身者あるいは近くの大学に通う大学生のための部屋に改修。ここでは、点在した空き部屋を集合住宅のように使いながら共有していく住宅のかたちを考えた。

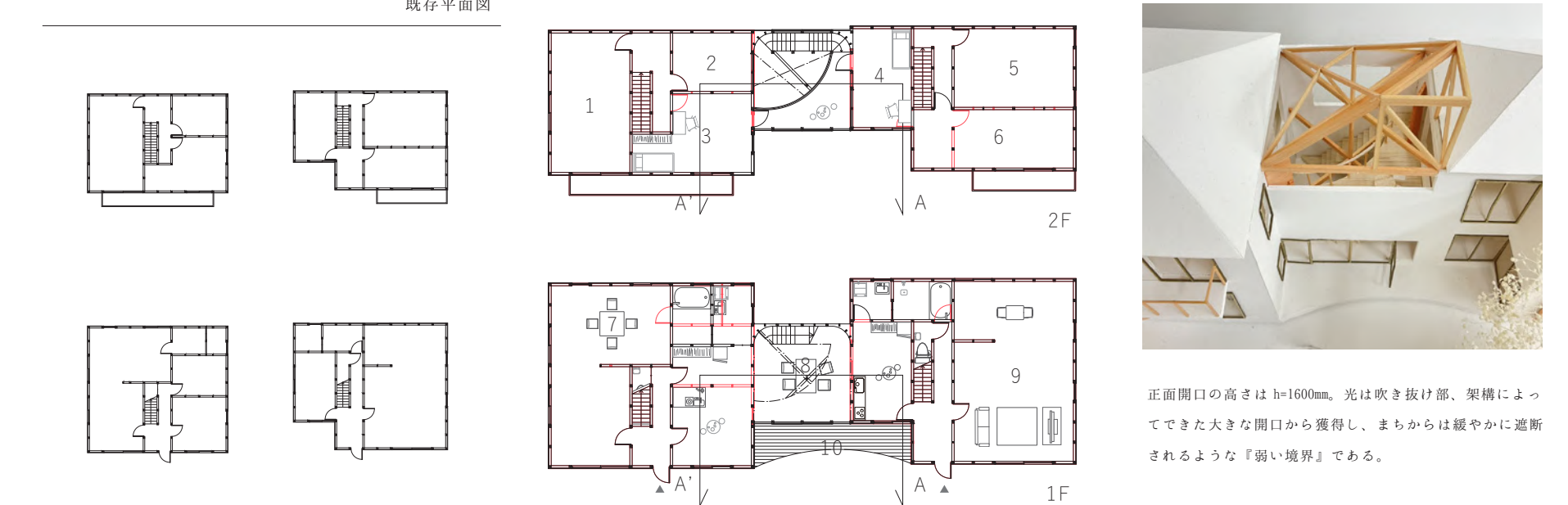


- 1 dressing room
- 2 kitchen
- 3 rent room ①
- 4 rent room ②

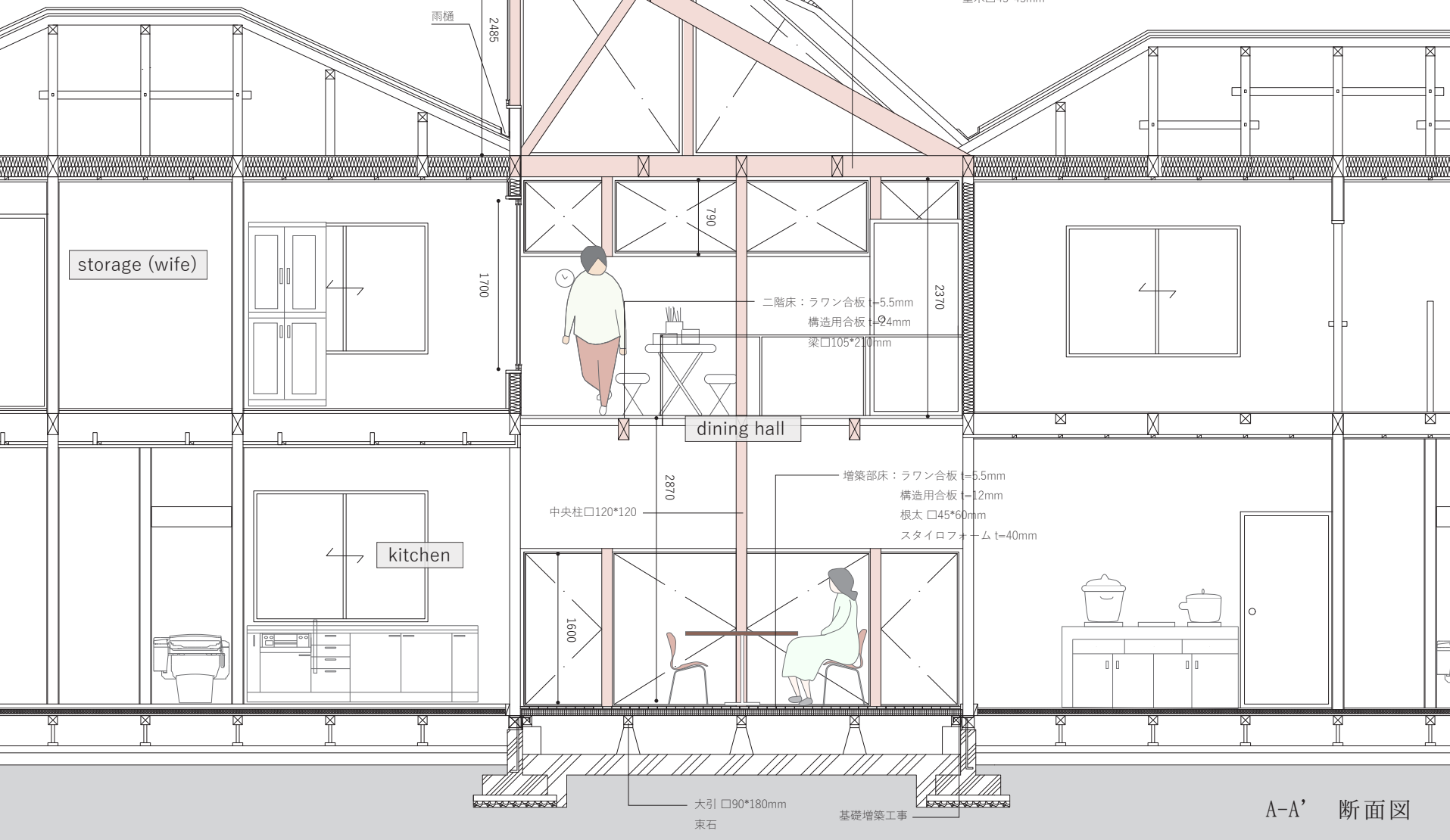
機能：賃貸住宅（２部屋）  
工事主・所有者：家所有者あるいは不動産事業者



家が大量に余ると予想されているということは、それらをぜいたくに使うという選択も考えられるだろう。この夫婦は、共働きでひとつ屋根の下に住むには生活リズムに混乱が生まれるため、隣同士の空き家を改修、真ん中にダイニングホールを設計し、ライフスタイルに合わせた『二つ屋根のイエ』を考えた。もとは家族によって関係をもつことがなかった二つの近代住居を解体し、新しい価値を付加することで、プロトタイポロジーを生み出す試みである。



機能：住居（リノベーション分譲住宅）  
工事主：不動産事業者  
所有者：共働き夫婦



- 1 room (wife)
- 2 storage(wife)
- 3 guest room ①
- 4 guest room ②
- 5 storage(husband)
- 6 room(husband)
- 7 living room
- 8 dining hall
- 9 living room
- 10 wood deck

正面開口の高さはh=1600mm。光は吹き抜け部、架構によってできた大きな開口から獲得し、まちは緩やかに遮断されるような『弱い境界』である。

架構：梁□105\*210mm  
柱□105\*105mm  
筋交① □90\*90mm  
筋交② □90\*180mm  
垂木□45\*45mm

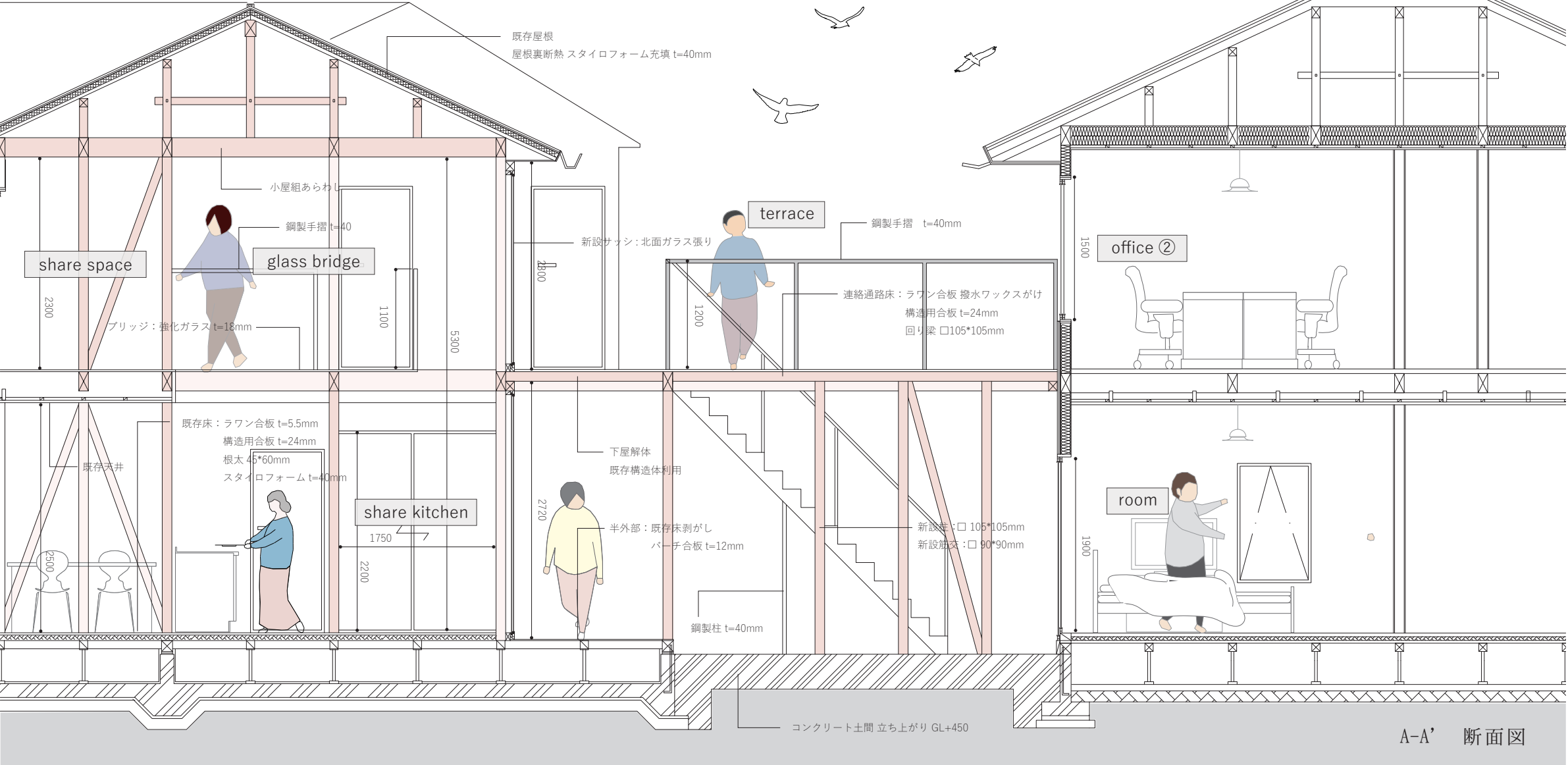
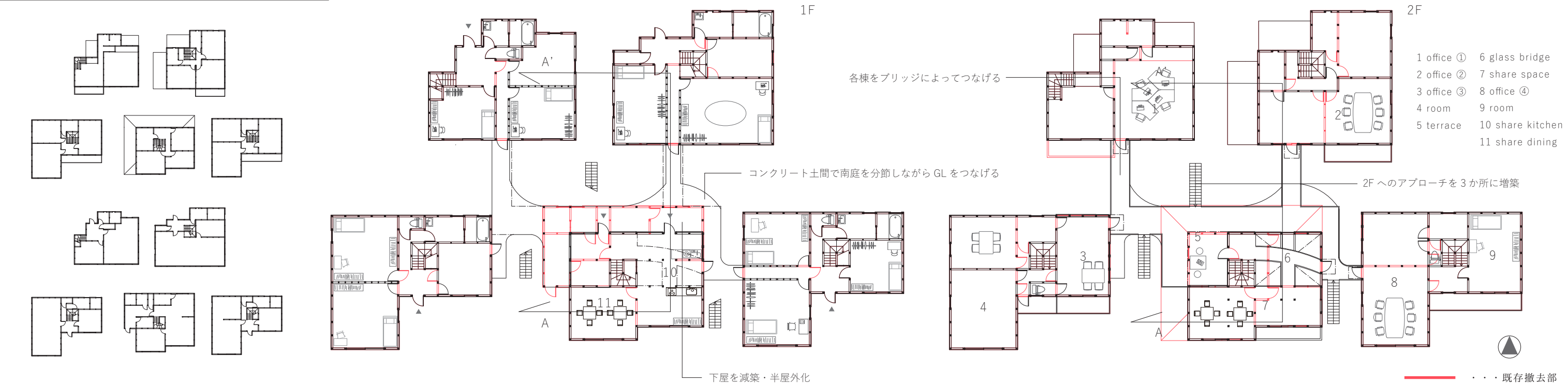
二階床：ラワン合板 t=5.5mm  
構造用合板 t=24mm  
梁□105\*210mm

増築部床：ラワン合板 t=5.5mm  
構造用合板 t=12mm  
根太 □45\*60mm  
スタイロフォーム t=40mm

A-A' 断面図

5軒の集まった空き家を貸しオフィス+住居に改修。オフィスで想像するのは、垂直に床が重ねられたビル群である。それは、空間が足りない都市需要にこたえるために無理に床を用意した結果である。郊外に余った床は、そのような需要に耐えることが可能ではないだろうか。オンライン化が進む昨今では無理に都市に職場を構える必要はないし、空間を贅沢に使うことができる。職住分離によってできた郊外は、職住一体の可能性を孕んでいる。彼らは会社が大きくなれば都市に移動するかもしれない。しかし、それが都市-郊外の新しい循環につながるのではないだろうか。

既存平面図



機能：オフィス+住居

工事主：不動産事業者

所有者：不動産事業者

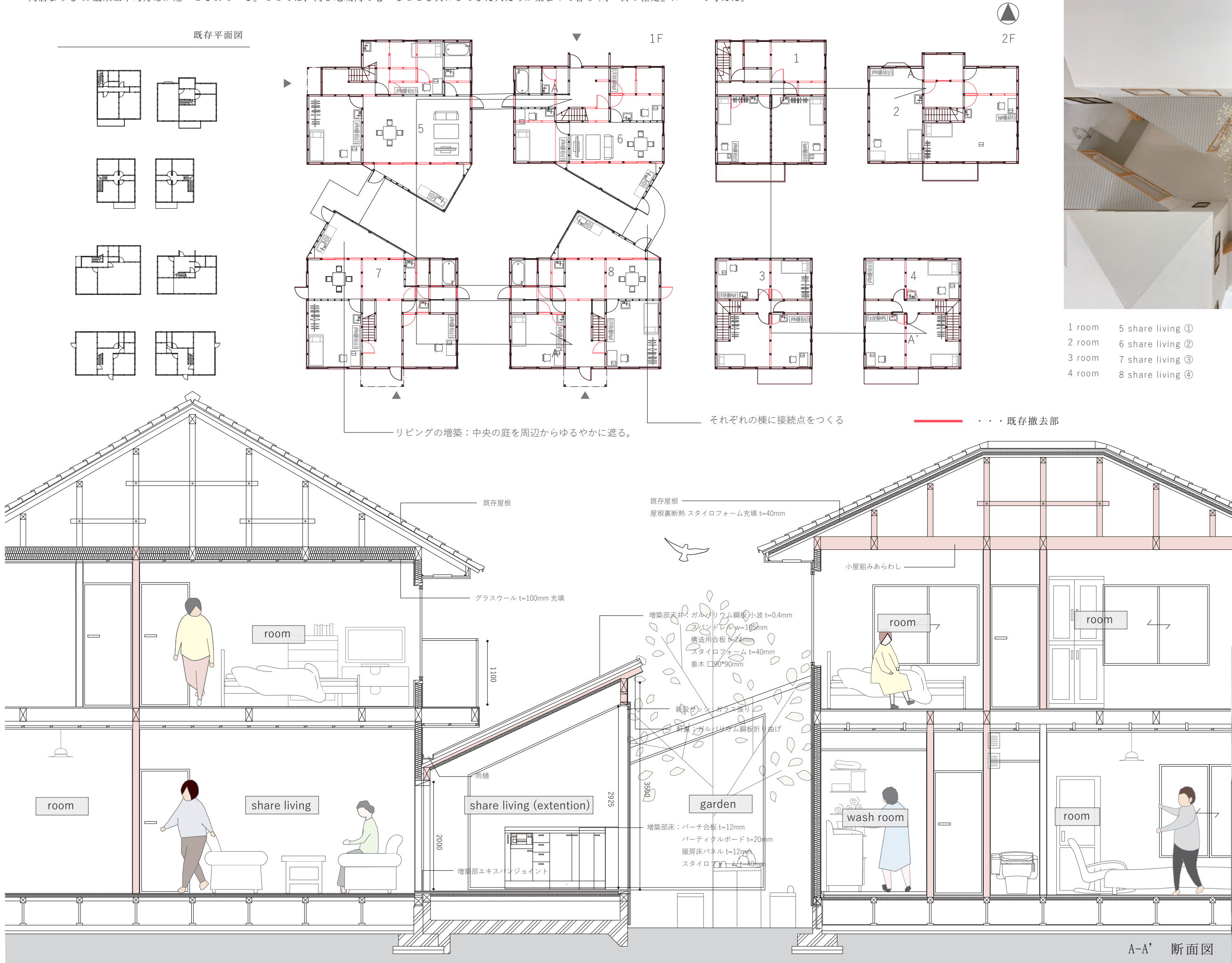
運営者：不動産事業者

利用者：入居者+近隣住民





同時代に家を購入した住居の集まりは、老いることも共にしてきた。それぞれが独居となった四軒の近代住居を『高齢独居のための集合住宅』へと改修する。周辺の家を持って余した高齢者たちはそれらを手放し、ここで新しい生活を始める。高齢化に伴って高齢独居は言わずもがな増加している。こと男性においては、同居よりも10歳以上平均寿命が短いとされている。ここでは、同じ地域内で老いることを共にしてきた人たちが集まって暮らす、『終の住処』について考えた。



1 room 5 share living ①  
2 room 6 share living ②  
3 room 7 share living ③  
4 room 8 share living ④

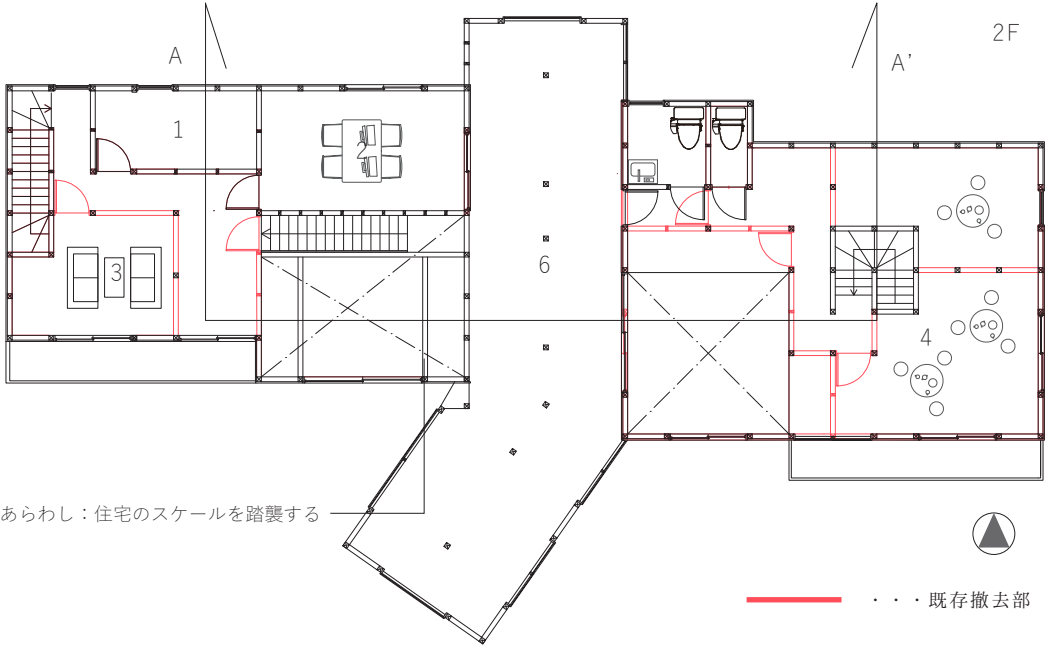
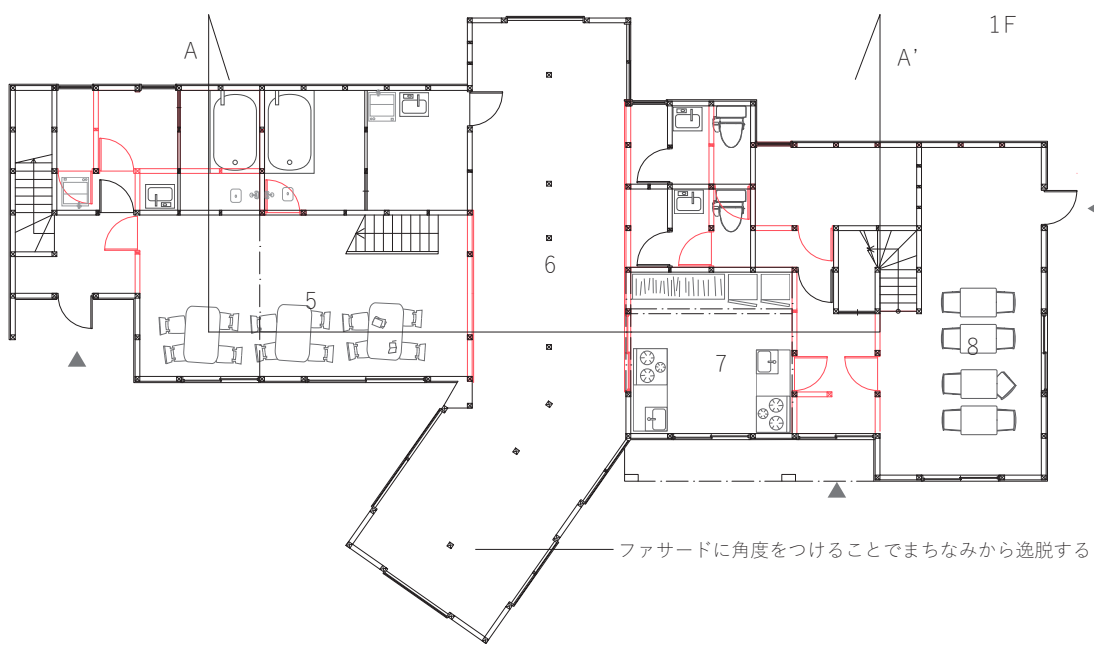
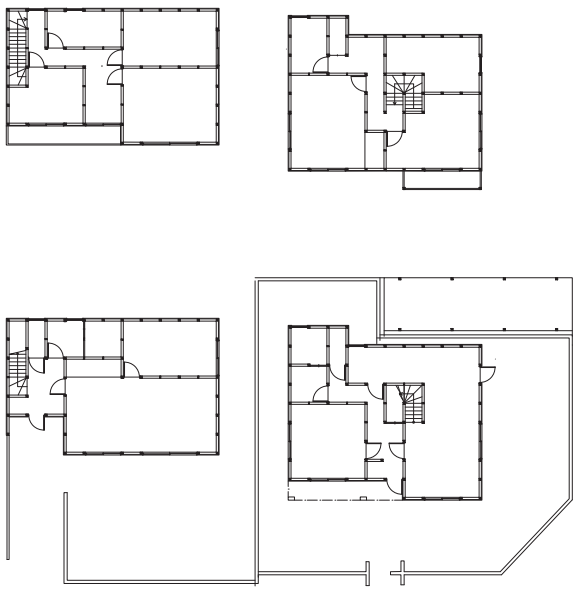
機能：集合住宅（高齢独居専用17戸）  
工事主・運営者：福祉法人  
所有者：福祉法人あるいは不動産事業者





中心にアトリウムを設え、二つの空き家を一体的に居場所化する。左右の空き家は住宅スケールを保ちながら周辺住民が共有できる新しい機能を挿入していく。中心に設計された脱住宅的なスケールを持つアトリウムには特徴のある架構を設計し、等価になりがちな空間同士を接続した。高齢者になるにつれて郊外に住むことが困難になるのは、日常的なケアを行う場所が少ないことが要因である。ここでは、地縁を継続しながらケアを継続的に受けることができる、新たな福祉施設のかたちを模索した。

既存平面図



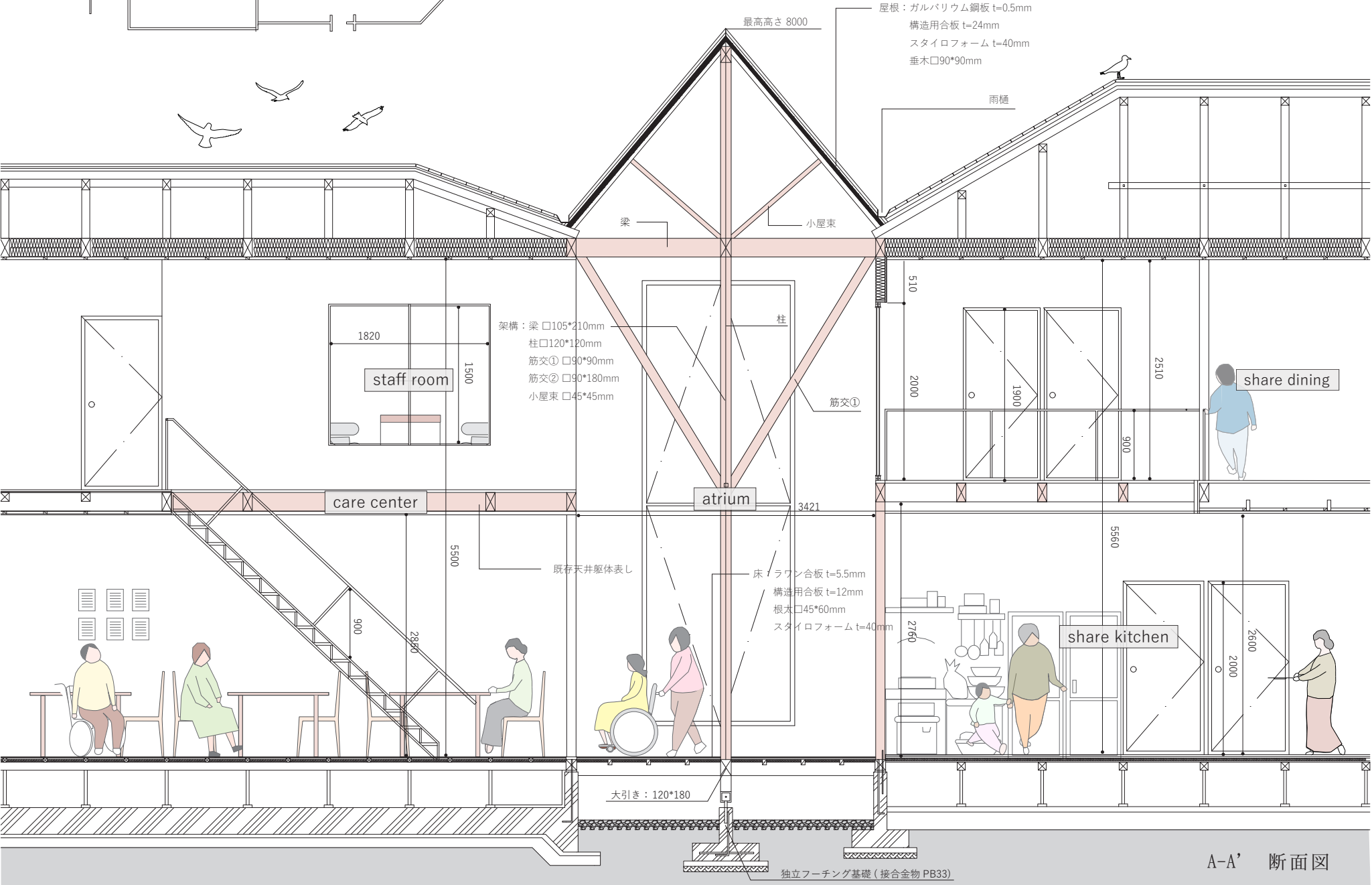
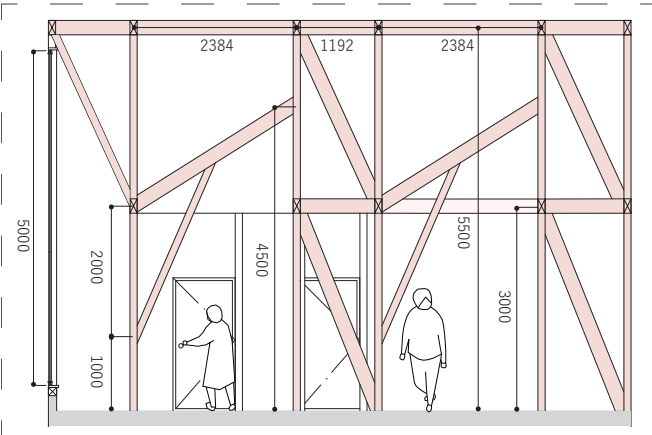
躯体あらかし：住宅のスケールを踏襲する

ファサードに角度をつけることでまちなみから逸脱する

--- 既存撤去部

- 1 storage ①
- 2 staff room
- 3 rest ara
- 4 share dining ①
- 5 care center
- 6 atrium
- 7 share kitchen
- 8 strage ②
- 9 share dining ②

機 能：複合（ケアセンター）  
工事主：不動産事業者＋福祉法人  
所有者：不動産事業者あるいは福祉法人  
運営者：福祉法人  
利用者：周辺に住む人々



A-A' 断面図







## 『近代住居解体論』

建築とともに、家族形式の解体が行われた街では、血縁関係でできた家族はもはや共同体の一部でなくなる。さらに、部分設計で生じた建築的な空間の変化から始め、利用者が減って生まれた空地や車がほとんど通らなくなった道路など、街区スケールでの解体が行われる。解体された住居たちはそれぞれが新たな形へと結実する。商店のつらなりやオフィス、住居たちは近代化の終焉により閉ざされた都市との関係をつなぎとめながら、新しい住宅地の様相を見せるものとして、私はこの『近代住居解体論』を提案する。

- 1 SOHO① (cycle shop)
- 2 SOHO① (bento shop)
- 3 SOHO② (work space①)
- 4 SOHO② (work space②)
- 5 SOHO③ (work space③)
- 6 SOHO③ (clothing store)
- 7 SOHO④ (goods shop)
- 8 SOHO④ (cafe)
- 9 SOHO⑤ (book shop)
- 10 SOHO⑤ (bar)
- 11 SOHO⑥ (design office)
- 12 SOHO⑥ (meeting room)
- 13 SOHO⑦ (workshop)
- 14 storage①
- 15 storage②
- 16 storage③